

## 本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2022 王欽

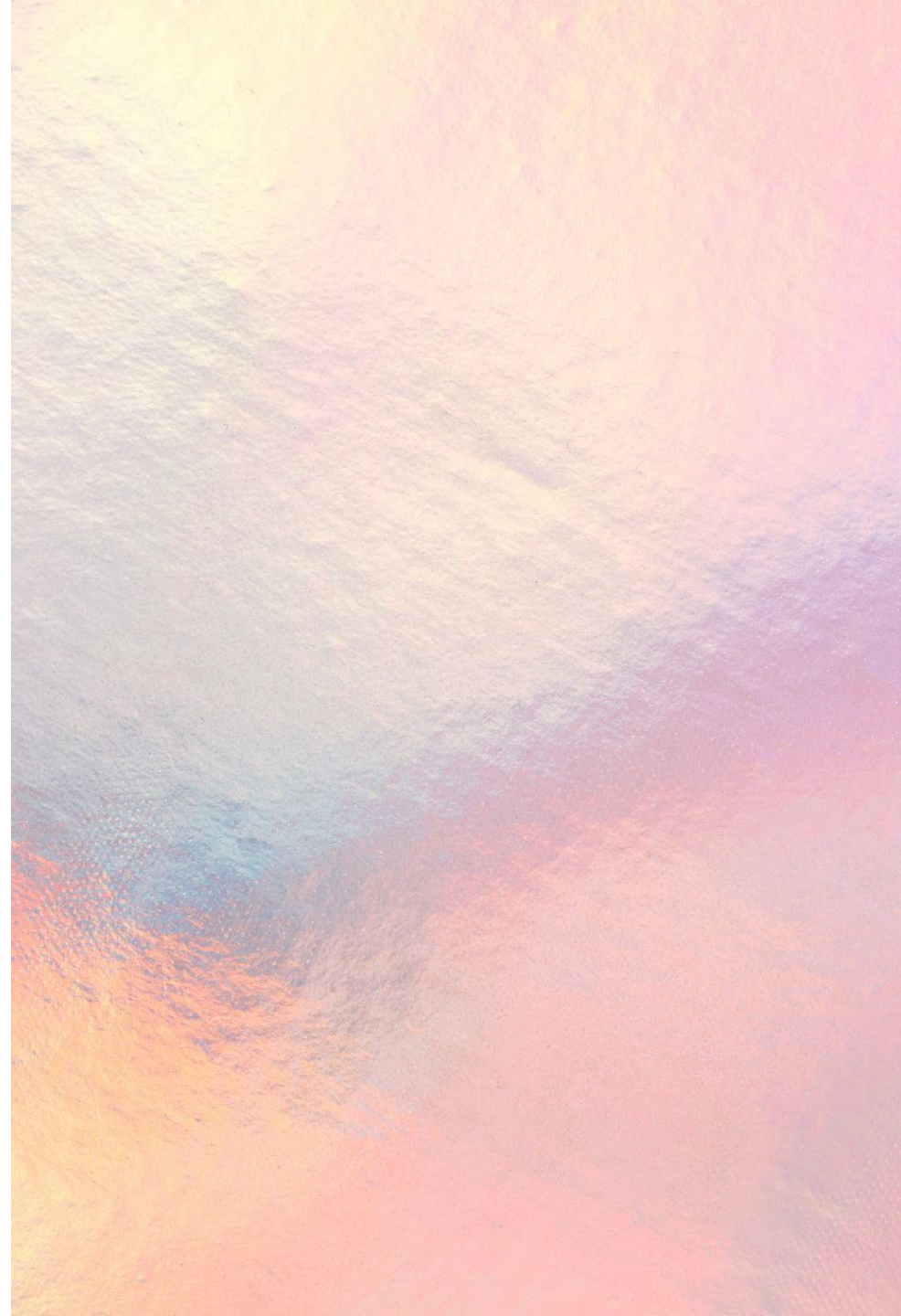


# 共生を求めること・共 生を堪えること ——魯迅を再読する

---

王欽

(東京大学総合文化研究科)



# 魯迅『阿金』(1934)とその遭遇

「阿金」は『漫画生活』に執筆した。ところが、掲載不許可になったばかりでなく、さらに南京の中央宣伝会へ送ったらしい。これは、ほんとうは、ただ漫談で、深意は少しもないのに、どうしてこんな大問題を惹き起こしたのか、わたし自身どうしても見当がつかなかった。その後、原稿を取り戻したとき、まず、第一頁に二個の紫色の印があった。一つは大きく、一つは小さく、「抽去」と記してある。(中略)傍線を見て、いくつか理由のわかるところがあった。たとえば、「主人が外国人」、「爆弾」、「市街戦」等々は、もちろん、とりあげないほうがよろしい。しかし、わたしがどうしても腑に落ちないのは、なぜ、わたしが死んでも「同郷会を開かせるほどの力がないかもしれない」と言えないのかという理由である。まさか官憲の意向は、わたしが死ねば同郷会が開かれるはずだと思っているのではあるまい。(『魯迅全集』(第八卷)所収、今村与志雄訳(学習研究社、一九八四年)、二四六―四七頁)

# 『阿金』というタイトルについて

---

ちかごろ私は、阿金がいやでたまらない。

かの女は女僕である。上海でいう「娘姨」、外国人のいう「阿媽」だ。そして阿金の主人は、その外国人なのだ。（『魯迅文集』（第六卷）所収、竹内好訳（筑摩書房、一九八三年）、一一六頁）

# 「阿金」の行動と力

---

彼女には女友だちがたくさんいる。日が暮れると、次から次へと彼女の窓のところにやって来て「阿金、阿金！」と大声に呼びかける。それが夜中までつづく。ほかに男友だちも何人もいるらしい。いつか裏門のところで自説を発表したことがある。「上海まで来て、男をつくらないなんて……」（『魯迅文集』第六卷一一六頁）

不運なのは、彼女の住み込む家の裏門が、わが家の表門のはす向かいにあることだ。そのため「阿金、阿金！」のよび声が聞こえるたびに影響を受けないわけにはいかない。ときには文章が書けなくなるし、ときには原稿紙に「金」の字を書いてしまうことさえある。（同 一一六頁）

# いかに雑音に応答すべきか

---

ある夜、もう三時半を廻ったころ、私は翻訳にかかっている、まだ起きていた。ふと外で、人をよんでいる低い声がした。よく聞き取れなかったが、阿金をよんでいるのではなかったし、むしろ、私をよんでいるのでもなかった。こんなおそくに、いったい誰が誰をよんでいるのか、と思ったものだから、すぐ立ち上がって、二階の窓を開けてみた。ひとりの男が、阿金の部屋の窓を見上げて立っていた。男は私に気が付かなかった。いらぬ節介だったと後悔して、窓を閉めて引っ込もうとしたとき、はす向かいの小窓に阿金の上半身がのぞいた。そしてすぐ私に気づいて、男に何か告げ、私の方を指して男に手を振って見せた。すると男はいそいで立ち去った。悪いことでもしたように心が落ち着かなくなっていて、私は筆が動かなくなった。（『魯迅文集』第六巻 一一七頁）

# 雑音とは何か—ジャック・アタリの考察

---

雑音とは、通信過程において、メッセージの聴取を妨げる音響、即ち、時を同じくする生の音、一定の範囲内の周波数と種々の強度をもった音の総体である。雑音はそれ故、それ自身独自に存在するのではなく、それを含んだシステムとの関係においてのみ存在する——発信、通信、受信。……

雑音はつねに、メッセージを構成するコードに対する破壊、無秩序、汚れ、冒瀆、攻撃等々と受け取られていた。こうして、雑音は、あらゆる文化のなかで、凶器、瀆神、災禍の観念に結びつけられていたのである。

（ジャック・アタリ『ノイズ 音楽／貨幣／雑音』、金塚貞文訳（みすず書房、二〇一二年）、四七-四八頁）

愛人の腕の下は由来、安身立命の場所なのだ。イプセンの芝居に出てくるペール・ギュントだって、失敗の後とうとう愛人のスカートの後ろに隠れて、子守唄をうたってもらったほどの大人物なのだ。どうもこの点阿金は、愛情も気概もノルウェーの女性に及ばないらしい。ただ感覚だけは鋭くて、やっと男がたどりついた時には裏門はぴったり閉め切っていた。かくて男は退路を断たれて、立ち止まるほかなかった。

それでも私は、やはり阿金がいやだ。「阿金」の二字を思い出すのもいやだ。むろん、近所で騒ぎを起こした、というだけで怨み骨髄というわけではない。なぜいやかといえば、わずか数日のあいだに、私の三十年来の信念と主張に動揺をおこさせたからである。（中略）男権社会では女にそんな大きな力があるはずはない、興亡の責任はすべて男が負うべきだ、と考えていた。（中略）思いがけないことに、いま阿金は、とくに美貌でもなく、とくに才能があるわけでもない「娘嬢」の身でありながら、ひと月もたたぬうちに、私の眼の前で四分の一里四方に騒乱をまき起こした。かりに彼女が女王、または皇后、皇太后であったなら、その影響は推して知るべし、かならずや大乱を引き起こしたにちがいない。

（魯迅『阿金』、『魯迅文集』第六卷 一一九頁）



# 「阿金」の“偉力”＝文学の力

---

ここで、語り手の「信念と主張」について、もう一つの読解を提案したい。すなわち、阿金を中国歴史上の一人の女性として読むより、むしろ「阿金」という「偉力」、この独特な感受力（force of sensitivity）を通じて歴史における女性たちを理解し直していくという、新しい読みです。阿金を文学的女性の系譜に入れたら、これらの女性たちをあらためて感受力として把握できるようになる。

「阿金」という女性が象徴するのは（方法として「象徴」という言い方をあえてすれば）、ここでは、社会的アイデンティティではなく、ある種の力として、著しい特徴も迫力もないのに、また、ありふれたように見えるのにも関わらず、すでにつねに日常生活で見逃されている細かいことに応答しつつ、周囲の空気を騒然ならしめるまでに、強いものです。

# 「阿金」を「典型」から解放して

---

私は自分の文章の退歩を、阿金の大声のせいにするつもりはない。また、以上述べたことも、いくらか八つ当たりの気味がないとは言えない。しかしともかく、ちかごろ阿金がいやでたまらないこと、彼女が私の行く手に立ちふさがっているように思えることは事実である。（『魯迅文集』第六卷 一二一頁）

“愿阿金也不能算是中国女性的标本。”（阿金も中国女性の見本と見なされないように。）

# 結び—自分を「無数にいる人間」へと開く

---

街頭の光が窓からさし込んでいる。室内はほの明るいので、あらましの見当はつく。見なれた壁、壁と壁の境の線、見なれた本の山、その横には未製本の画集、さらに外部で進行しつつある夜、無限にひろがる空間、無数にいる人間、それらすべてが私と関係がある。私は存在し、生活している。そしてこれからも生活をつづけてゆく。私は、自分というものがますます確かなものに思えて、しきりに動きたい欲望にかられた——が、やがてまた睡りに落ちた。

(魯迅『「これも生活……」』、『魯迅文集』第六卷 二八三-八四頁)